



## 成長の跡を見せた年中の演技

年中・年長は、4月からこれまでに、読み聞かせをした絵本の中から子どもたちが好きな話を選んで、劇にします。これまでに演じられてきた話でも、担任が、毎年脚本を書き直しますから、話の筋は変えることができませんが、セリフや動作などが違ってきます。今年の年中さんの演目は、かつて演じられたものばかりで、新鮮味に欠けるかもわかりませんが、その年、その年の子どもたちにとっては、初めてのことであり、子どもたちにとっては、初めてのことであり、子どもたちに好まれた絵本は、時代が移り変わっても愛読されるという理由から取り組んでいます。

さて、去年の年少時代と比べていかがでしたか？昨年度は、仮園舎のオープクラスで劇遊びの世界に浸った子どもたちの姿を披露しましたが、今年はちょっとしたセリフもあり、登場人物になり切って演じる姿を見ていただきました。1年間で、ずいぶんと成長したものだと思います。自分の役を好きになり、大きな声で発表できたことや話の全てを覚えているために、お互いに助け合って演じたり、当日、欠席した子どもの代役を務めたりして、成長した姿を見ることができました。

初めての遊戯室での練習で、どのくらいの大きさの声を出してよいか分からなかった子どもも、先生から優しく「もう少し大きな声でね。」「ずいぶん大きな声になったよ。」とOKのサインを出され、少しずつ自信をつけていきました。大勢の保護者の皆様の前で、一人一人が主演として楽しく演じ、達成感を味わうことができたようです。少々、セリフに間が空いたり間違ったりしても、可愛らしくて、全く違和感がありませんでした。

面白いもので、今年の年中さんの劇では、すべての話に、動物が登場しました。このころの子どもたちというのは、動物を擬人化した話を好むことがわかります。また、登場人物の男や女に関係なく、自分が気に入れば、その役を演じるというのも、このころの特徴と言えます。「せんたくかあちゃん」で、母さん役を男の子が演じていましたが、楽しく演じていたのがお分かりいただけたでしょうか。改めて、子どもは、無限の可能性を秘めているんだなと思いました。



## 小さいころから読書習慣を



絵本の読み聞かせは、絵本の良さに触れさせるとともに、子どもたちに読書習慣を身に付けさせるために本園が大事にして

いる教育活動の一つです。毎日の担任の読み聞かせで、子どもたちは絵本の世界を楽しんでいます。さらに、絵本ボランティアのお母さん方の日々の活動のおかげで、絵本コーナーの絵本がいつも整理され、また、幼稚園では珍しく、絵本の貸し出しも行われ、子どもたちの読書環境は比較的整っているとと言えます。子どもたちが成長していくにつれ、絵本の世界から抜け出して物語の世界へ、或いは、自分の興味・関心のある本へと進んで行ってほしいと願っています。

毎年5月に、全国の小・中・高等学校の児童生徒を対象に読書状況について調査が行われます。今年5月の1カ月の平均読書冊数の結果は、小学生が11.3冊、中学生が4.7冊、高校生が1.4冊となっています。逆に、5月の1か月間に1冊も本を読まなかった人を不読者といいますが、その割合は、小学生は6.8%、中学生は12.5%、高校生は55.3%という結果でした。

この結果を見ると、小さいころから保護者ご自身で子どもたちに読み聞かせを行い、年齢が上がるにつれて、少しずつ自力で読書できるような読書習慣を身に付けることが大切です。1988年に、千葉県私立高校から始まった朝の読書活動が全国に広がり、今でも、朝の10分～15分間、全校一斉の読書タイムが実施されていますが、中・高校生の不読者が多いのが気がかりです。スマホやゲームの影響でしょうか。

先日、世界79の国・地域で実施されたPISAの結果が発表され、日本の高校生の読解力が15位に落ちたということでした。原因はいくつもあるでしょうが、不読率も関係しているのではないのでしょうか。こうし



てみると乳幼児期からの読書習慣を大切にしたいものです。

どうぶつ  
 とこや  
 バルバル